

長野県更埴市

更埴条里水田址前田地点

郷 津 遺 跡 II

一 丁 田 遺 跡

—新幹線関連事業に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 1

更埴市教育委員会



長野県更埴市

更埴条里水田址前田地点





郷 津 遺 跡 II
一 丁 田 遺 跡

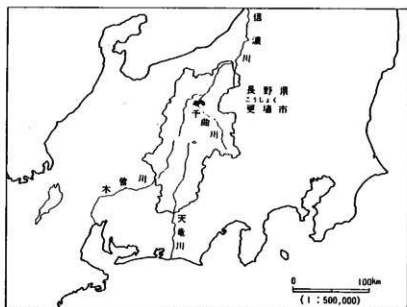
—新幹線関連事業に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 1

更埴市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成6～8年度に新幹線関連事業に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書の編集及び執筆は小野紀男が行った。
3. 現場における実測図は各担当者が作成し、遺物の実測は小野が行った。
4. 本文中の遺構、遺物実測図の縮尺、表現は原則的に下記のとおりであるが、一部異なるものがある。
 - ・遺構： 住居跡 1/60 土坑 1/30
 - 遺物： 土器 1/4
 - ・遺構図版の  は焼土、 は炭化物を表している。
 - 遺物図版の  は赤色塗彩、 は黒色処理を表している。また、須恵器は断面を黒塗り、灰釉陶器はスクリーントーンで表現した。
 - ・住居跡の主軸方向はカマド、または北壁を中心に設定した。
- 5 本書中の方位は平面直角座標系第Ⅱ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 6 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には、更埴条里水田址前田地点は「MED」、郷津遺跡は「GOT2」、一丁田遺跡は「ICD」と表記した。



更埴市の位置

目 次

例 言・目 次

第1章 調査の概要	1
第2章 発掘調査に至る経過	3
第3章 遺跡の環境	4
第4章 更埴条里水田址前田地点	
第1節 概要	5
第2節 遺構と遺物	7
第3節 小結	16
第5章 郷津遺跡	
第1節 概要	17
第2節 遺構と遺物	19
第3節 小結	30
第6章 一丁田遺跡	
第1節 概要	31
第2節 遺構と遺物	33
第3節 小結	37
写真図版	

第1章 調査の概要

- 1 調査遺跡名 更埴糸里水田址前田地点 (市台帳No.29)
郷津遺跡 (市台帳 No.31-22)
一丁田遺跡 (市台帳 No.31-9)
- 2 所在地及び土地所有者 更埴市大字屋代字前田 428-30 番地外
郷津遺跡 更埴市大字屋代字郷津 803-4番地外
一丁田遺跡 更埴市大字屋代字一丁田1561番地外
更埴市
- 3 原因及び事業委託者 公共事業=新幹線関連市道建設に伴う発掘調査
更埴市 (建設課)
- 4 調査の内容 発掘調査
更埴糸里水田址前田地点 約 500㎡
郷津遺跡 約 300㎡
一丁田遺跡 約 300㎡
- 5 調査期間 更埴糸里水田址前田地点 平成 6 年 11 月 24 日～平成 7 年 1 月 9 日
郷津遺跡 平成 7 年 11 月 24 日～平成 7 年 12 月 27 日
一丁田遺跡 平成 8 年 4 月 12 日～平成 8 年 4 月 30 日
- 6 調査費用 更埴糸里水田址前田地点 1, 1 1 7, 4 9 1 円
郷津遺跡 1, 8 9 5, 4 3 7 円
一丁田遺跡 1, 3 6 5, 4 4 6 円
整理調査 9 9 3, 9 3 8 円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 矢島宏雄 (一丁田遺跡) 更埴市教育委員会
小野紀男 (更埴糸里水田址前田地点・郷津遺跡) 更埴市教育委員会
- 調査参加者 猿渡久人 大井操子 岡田栄子 春日 実 金井順子 国光一徳
久保啓子 小林千春 小林昌子 小林芳白 小林芳隆 近藤孝文
高野貞子 中村久美子 中村文恵 西沢 修 西沢捨太郎 野沢貞雄
福島辰男 松本 晃 宮尾春実 宮尾多喜男 宮崎恵子 宮崎米雄
宮島吉治 村山 豊 矢島洋子 柳沢悦子 吉里義治
- 事務局 更埴市教育委員会生涯学習課 (平成 6、7 年度社会教育課、8～10 年度文化課)
教育長 下崎文義 (安藤 敏 前任者)
教育次長 滝沢賢二 (下崎 巖 矢島弘夫 竹内幸義)
課長 柳原康広 (山崎芳之 西巻 功 坂口寛子 西沢秀文)
文化財係長 金井幸二 (下崎雅信)
係員 佐藤信之 小野紀男 宮島裕明 堀内美和
(矢島宏雄 岡田 勝 春原峰子)

8 種別・時期	更地桑里水田址前田地点	集落跡	平安時代	
遺構・遺物		竪穴住居跡	8棟	
		土坑	5基	
		溝跡	13基	
		畠跡	1面	
		出土遺物	平安時代	コンテナ7箱
郷津遺跡		集落跡	弥生～平安時代	
		竪穴住居跡	18棟	
		溝跡	1基	
一丁田遺跡		出土遺物	弥生～平安時代	コンテナ8箱
		集落跡	古墳時代～中世	
		竪穴住居跡	5棟	
		水田面	1面	
		井戸跡	1基	
	出土遺物	古墳時代～近世	コンテナ2箱	



第1図 発掘調査風景（一丁田遺跡）

第2章 発掘調査に至る経過

平成6年11月、新幹線関連事業に伴う市道建設事業が埋蔵文化財の保護を行わないまま発注されていることが明らかとなった。市教育委員会では、ただちに長野県教育委員会、日本鉄道建設公団、市建設課とその保護について協議を行った。当該地では、新幹線本線部分を長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターと略す）が発掘調査を行っており、同センターによる調査も検討されたが、諸校の事情により市教育委員会により調査が行われることとなった。このため、矢板を挟んで県埋文センターと市教委が隣り合わせで調査を行うという、変則的な調査となってしまった。また、今後このようなことが起こらないよう、定期的に保護協議を行うこととした。また、整理・報告作業については、新幹線関連事業に伴う一連の調査が終了した後、改めて行うこととした。

保護協議後、ただちに調査の準備に取りかかり、平成6年11月24日より、更埴桑里水田址前田地点の調査を開始した。検出作業は比較的容易であったが、すぐ隣で県埋文センターが調査を行っており同一の遺構を両者で別々に報告することとなってしまった。工作物の撤去などがあり、途中一時中断もあったが、平成7年1月9日、無事終了した。

平成7年10月に入り再度保護協議を行ったところ、郷津遺跡及び一丁田遺跡内において事業が計画されていることが判明した。郷津遺跡については平成7年度中に、また一丁田遺跡については平成8年度に調査を行うこととなった。市教委では、平成7年度より国道403号線土口バイパス建設に伴う発掘調査を開始しており、また民間の開発事業に伴う調査も予定されていたため、郷津遺跡の調査は平成7年11月24日からとなってしまった。冬場の調査のため大雪など悪天候に悩まされながらも、12月27日、調査を終了した。

平成8年4月12日より、一丁田遺跡の調査を開始した。4月18日からは、県埋文センターがすぐ北側で調査を開始した。関連市道建設に伴う調査ではあるが、鉄建公団施工部分については県埋文センターでの調査となったため、同一の路線上で別々の機関での調査となってしまった。4月30日に調査は終了し、新幹線関連市道建設に伴う調査は、整理・報告作業を残すのみとなった。

市教育委員会では平成7年度以降、土口バイパス建設や屋代中学校改築など、大規模開発に伴う発掘調査が続き、その間、本事業に伴う整理・報告作業は棚上げとなっていた。平成11年度には、これら大規模開発に伴う調査も終了し、ようやく平成12年度に整理・報告作業を行うこととなった。

第3章 遺跡の環境

遺跡は、長野県更埴市大字屋代に所在する。千曲川が北西から北東へ大きく流れを変える右岸に位置し、広大な自然堤防及び後背湿地を形成している。この自然堤防は、東西 3.5km、南北 1kmの規模を持ち、屋代遺跡群として把握され、更埴市最大の遺跡群となっている。また、後背湿地は古くから水田として利用され、更埴条里水田址として把握されている。屋代遺跡群の成立は、これまで弥生時代中期と考えられてきたが、県埋文センターの調査により、縄文時代中期前葉までさかのぼることが明らかにされた。また、国府・郡府木簡など官衙に関連すると考えられる遺物も多数出土しており、屋代遺跡群周辺に初期国府が存在していた可能性が指摘されている。

更埴条里水田址は通称「屋代田んぼ」と呼ばれ、肥沃な水田地帯となっている。この後背湿地の開発は弥生時代中期には開始されており、9世紀前半には条里制が施行されている。ほ場整備が行われる前は、条里的地割が良好に観察することができ、1960年代には、国内初とも言える埋没条里の総合学術調査が行われている。しかしながら、更埴条里水田址は全面にわたって水田址が広がっているものではなく、中州状の微高地には集落が形成されていたことが明らかとなっている。

調査は、これらの遺跡群の西端を南北に縦断する形で建設された北陸新幹線の側道に当たる部分であり、更埴市が施工する地点について調査を行った。鉄建公団施工部分については県埋文センターが調査を行っている。



1 更埴条里水田址前田地点 2 郷津遺跡 3 一丁田遺跡 4 馬口遺跡 5 町津遺跡 6 生仁遺跡

第2図 遺跡位置図 (1:20,000)

第4章 更埴条里水田址前田地点

第1節 概要

発掘調査地は東経 138度 8分 4秒、北緯36度32分 2秒、海拔 357m付近に位置し、更埴市大字屋代字前田及び内田に所在する。検出した遺構は、竪穴住居跡 8棟、土坑 5基、溝跡13基、ピット 8基、鳥跡 1面である。

住居跡はいずれも平安時代に属するものであり、県埋文センター調査区においても、1棟を除き該期の住居跡を検出している。調査区北半部より集中的に住居跡を検出しており、南半部では鳥跡を検出している。県道白石更埴線を挟んだ北側においても県埋文センター調査によって住居跡が多数検出されており、一帯が大規模な集落跡であったことを示している。

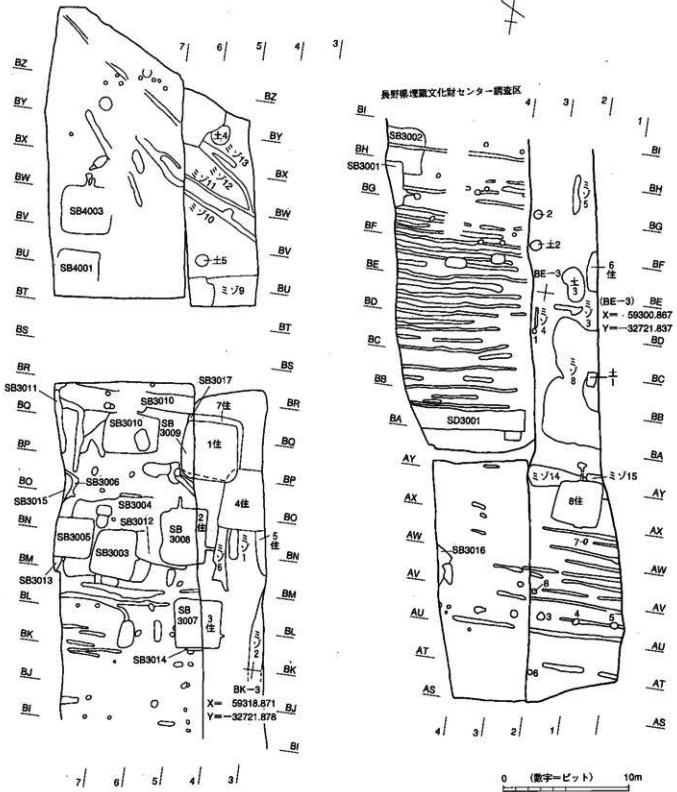
土坑は 5基検出している。1号土坑を除いて円形のプランを基本とするものであり、3号土坑を除いては出土遺物はほとんど無い。溝跡は13基検出しているが、14・15号溝が区画溝である可能性がある他は用途不明である。

出土遺物は土師器を中心としてコンテナ約 7箱分が出土した。1・4・7号住居跡から出土したものが多くを占めている。住居跡から出土した遺物には、灰軸陶器が比較的高率に含まれており、県埋文センター調査では緑軸緑彩陶などが出土している。



第3図 更埴条里水田址前田地点現況（平成12年7月）

4



第4図 更埴条里水田趾前田地点全体図

第2節 遺構と遺物

1号住居跡 (第5・6図、図版1・4)

位置：BP～BR-5・6 西側の一部を県埋文センターがSB3009として調査した。

規模：4.30m×4.50m 平面形：隅丸方形 主軸方向：N

新旧関係：4・7号住居跡を切る。

床面：ほぼ平坦で顕著であり、全面にわたって硬化していた。

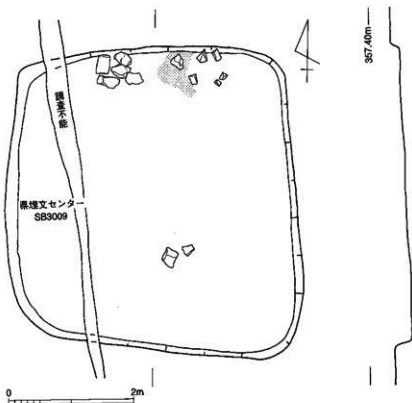
壁：立ち上がりはやや角度を持っている。最大壁高は県埋文センター調査では50cmを測るが、更埴市調査部分では25cmを測るのみであった。

柱穴：不明

カマド：北壁ほぼ中央付近に角礫及び炭化物の集中が認められることから、この付近にカマドがあったものと考えられるが、袖や煙道などは検出することはできなかった。

遺物：比較的多く出土しており、県埋文センター調査分と合わせて図化できた遺物は28点に上る。1～8は土師器坏であり、いずれも底部に回転糸切痕を残している。外面にはロクロナデによる稜が顕著に認められ、4～8は内面黒色処理されている。9・10は土師器皿、11は灰釉陶器の皿である。12・13はロクロ成形の小型甕である。

本住居跡は、食膳具に内黒土師器と非内黒土師器がほぼ同数を占め、また須恵器がほとんど認められないことから、10世紀前半と考えられる。



第5図 1号住居跡

2号住居跡 (第7図、図版5)

位置：BM~BO-5 西側の大半を県埋文センターがSB3008として調査した。

規模：3.75m×4.30m 平面形：隅丸方形 主軸方向：N

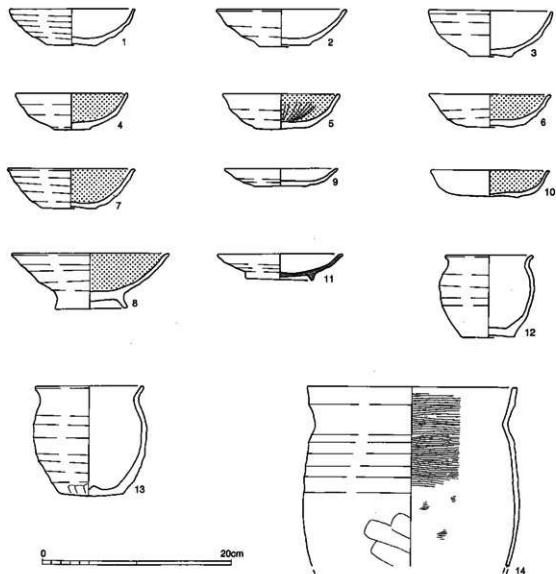
新旧関係：6号溝に切られる。

床面：ほぼ平坦である。県埋文センター調査部分では顕著な貼床が認められているが、更埴市調査部分は壁際であるため、硬化面は認められなかった。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱穴：県埋文センター調査では浅いピットが検出されているが、支柱穴と考えられるものはない。更埴市調査では検出していない。

カマド：北壁及び東壁から検出している。東壁のものは煙道のみを検出であり、袖・火床等まったく検出することはできなかった。県埋文センター調査の北カマドからは火床や被熱した角礫が検出されているため、東側から北側に作り替えられたものと考えられる。



第6図 1号住居跡出土遺物

遺物：県埋文センター調査では多くの遺物が出土しているが、更埴市調査では調査部分がわずかであるため出土量は少なく、図化できたものは1点のみである。1は灰釉陶器碗である。比較的丸みを帯びた形状をしており、釉はハケ塗りである。県埋文センター調査からは緑釉緑彩陶など特殊な遺物が出土している。

本住居跡は県埋文センター調査から、9世紀後半と考えられる。

3号住居跡（第8図、図版1・5）

位置：BK～BM-5 西半部を県埋文センターがSB3007として調査した。

規模：3.75m×4.00m 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-90° - E

新旧関係：県埋文センター調査のSB3014、SK3029を切る。

床面：平坦であり、ほぼ全面にわたって硬化面が認められた。

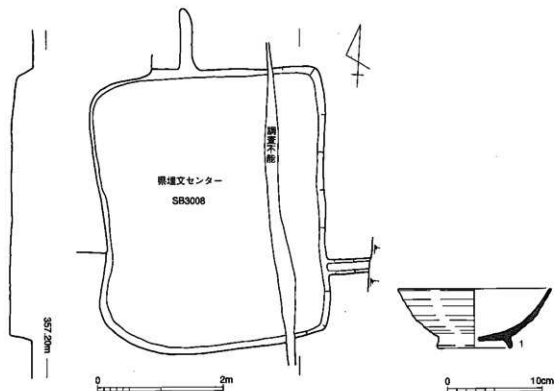
壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱穴：不明

カマド：東壁の南よりから煙道と炭化物の集中を検出したが、袖は完全に破壊されていた。

遺物：出土量は非常に少ない。県埋文センター調査分と合わせても図化できた遺物は5点のみである。1・2は土師器坏である。両者共内面黒色処理されているが、粗雑な作りである。県埋文センター調査からも、内面黒色処理された坏とロクロ成形された小型甕が出土している。

本住居跡は、わずかに出土している坏がいずれも内面黒色処理されたものであることから、9世紀代と考えられる。



第7図 2号住居跡及び出土遺物

4号住居跡 (第9・10図、図版2・5)

位置: BN~BP-4・5 規模: 4.75m×

平面形: 隅丸方形 主軸方向: N

新旧関係: 5・7号住居跡を切り、1号住居跡に切られる。

床面: ほぼ平坦であり、顕著でよく締まっていた。

壁: ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱穴: 不明

カマド: 北壁に炭化物の集中が認められることから、北カマドであったと考えられるが、袖や煙道等は検出することはできなかった。

遺物: 比較的まとまった量の遺物が出土している。1~6は土師器である。いずれも内面黒色処理され、底部には回転糸切痕が残っている。1、2の口縁部は直線的であるが、2~6の口縁部は屈曲している。7は皿である。坏と同様に内面黒色処理され、底部には回転糸切痕が残っている。底部の器厚が厚く、ずっしりとした重量感のあるものである。8、9は灰釉陶器壺である。8は小壺であり、軸は漬け掛けである。内面底部は気泡により盛り上がっている。8、9共扁平な高台が付いている。10は瓦質の風字硯である。底部外面はヘラケズリされ、脚の剥離した痕跡が残っているが、どのような形態の脚であったかは不明である。内面には飾り凸帯が付けられ、筆を置くための半円形の凹みが2か所作られている。海の部分にはわずかながら擦痕が認められ、飾り凸帯の前には墨痕が残っている。

本住居跡は、食膳具が内黒土師器で占められており、須恵器の食膳具が認められないことから、9世紀後半代と考えられる。また風字硯の出土から識字者が居住していた可能性が指摘できる。

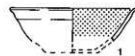
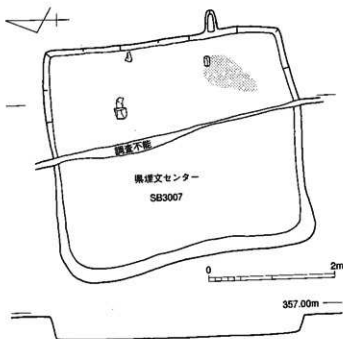
7号住居跡

(第11・12図、図版2・6)

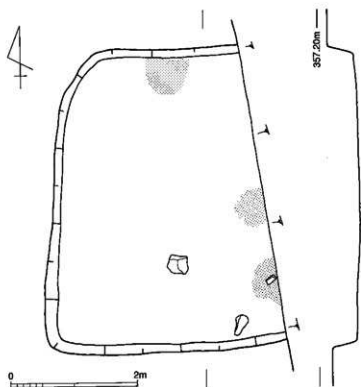
位置: BP~BR-5・6 西側の一部を県埋分センターがSB3017として調査した。

規模: 4.20m×4.45m

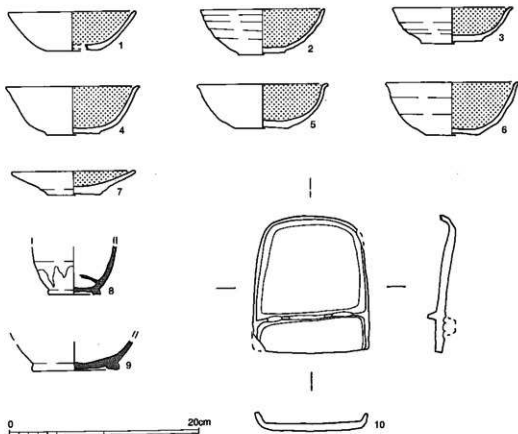
平面形: 隅丸方形



第8図 3号住居跡及び出土遺物



第9图 4号住居跡



第10图 4号住居跡出土遺物

主軸方向：N 新旧関係：1・4号住居跡に切られる。

床 面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

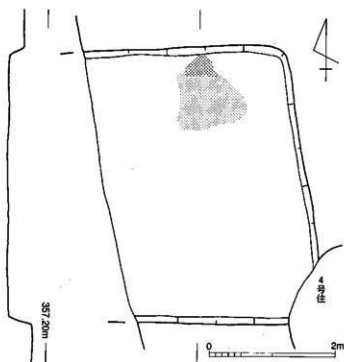
壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱 穴：不明

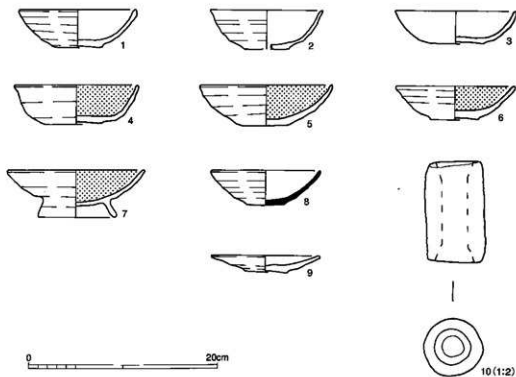
カマド：北壁やや東側より火床と炭化物の集中を検出したが、袖等は完全に破壊されていた。

遺 物：完形に近い土器がまとめて出土している。1～7は土師器坏である。4～7は内面黒色処理され7には足の長い高台が付いている。8は須恵器坏であるが軟質である。9は土師器皿で、底部には回転糸切痕が残っている。10は土師質の土鍾である。

本住居跡は、食膳具に須恵器がわずかに認められ、また重複する住居跡の新旧関係から9世紀後半代と考えられる。



第11図 7号住居跡



第12図 7号住居跡出土遺物

8号住居跡 (第13・14図、図版2・3)

位置: AX・AY-1・2 規模: 3.45m×3.50m

平面形: 隅丸方形

主軸方向: N

新旧関係: 14・15号溝を切る。

床面: ほほ平坦であり、全面にわたって良く叩き締められていた。北側を除く壁際に周溝が巡っている。

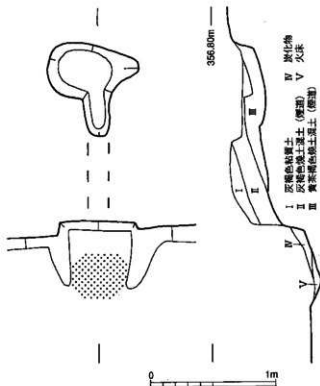
壁: ほほ垂直に立ち上がり、最大壁高70cmを測る。また、南壁には方形の張り出しが認められる。

柱穴: 不明

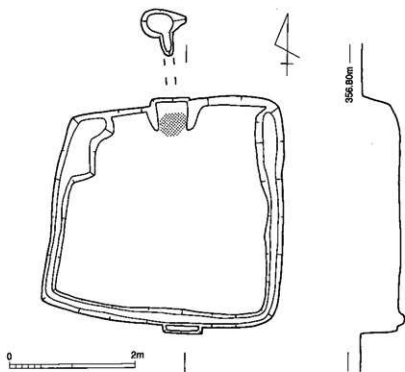
カマド: 北壁中央より検出した。ほほ完全な形で残っている。煙道が約1m延びて不正円形の煙出となっている。煙道は断面で2層確認でき、同じ場所に作り替えられたものと考えられる。

遺物: 完掘できた唯一の住居跡であるが、小破片がわずかに出土したのみで、図化できたものはない。

本住居跡は、周囲の畝に関連する遺構を切って作られていることから、9世紀後半以降と考えられる。



第13図 8号住居跡カマド



第14図 8号住居跡

3号土坑 (第15図、図版3・6)

位置: BD・BE-2・3 規模: 1.60m×2.75m

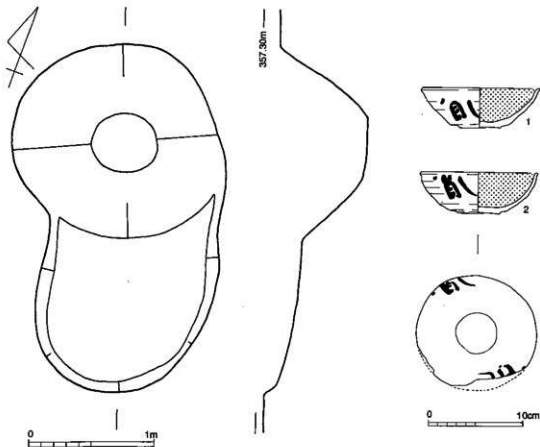
平面形: 楕円形 主軸方向: N-20° -W

新旧関係: なし

構造: 楕円形を呈しているが、南側は非常に浅く別々の遺構である可能性も否定できない。北側は直径約1.6mの円形であり、すり鉢状に凹んでいる。検出面からの深さ最大70cmを測る。検出当初はその平面形から土坑墓の可能性を考えていたが、北半部と南半部で構造が大きく異なるため、土坑墓である可能性は低いと考えられる。性格不明の遺構である。

遺物: 北側の土坑の斜面に引っかかるようにして完形に近い遺物が出土しているが、それ以外の出土はごくわずかである。1・2は共に内面黒色処理された土師器杯であり、外面には墨書が認められる。1・2共同じ文字が書かれていると考えられ、2は相対する2か所に書かれている。文字は判読できないものの、県立文センターが調査を行った長野市榎田遺跡の調査成果から「乙貞」の可能性があると考えられる。

9世紀代の遺構と考えられる。



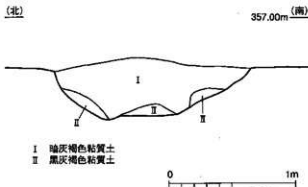
第15図 3号土坑及び出土遺物

14・15号溝 (第16図)

位置: AX・AY-1~3 規模: 最大幅1.5m 断面形: 逆台形

方向: N-90°-W 新旧関係: 8号住居跡に切られる

構造: 平面形、規模、主軸方向など、県埋文センター調査のSD3001に酷似している。14号溝は県埋文センターと更埴市調査区の境界付近で終わっており、端部は角張っている。15号溝は14号溝の東端から始まっており、やはり端部は角張っている。別々の遺構としているが14・15号溝共、一連の遺構であると考えられる。またSD3001とは3mの食い違いが認められる。更埴市調査区ではこの溝の北側では、南北方向に走る畝状遺構を、南側からは東西方向に走る畝状遺構を検出している。逆に、県埋文センター調査区では溝の北側では畝状遺構が顕著に検出されているが、南側ではそれほどでもなく、対照的である。県埋文センター調査ではSD3001は畝界を示す区画溝である可能性が指摘されており、14・15号溝も同様に区画溝であると考えられる。SD3001と14・15号溝が一連の遺構と仮定した場合、この3mの食い違いは何を示すのであろうか。



第16図 14号溝断面

遺物: 出土遺物はない。

畝跡 (図版3)

調査区南半部より検出しているが、検出状況が良くわかるものは14・15号溝以南である。幅30cm前後で50cm~1m前後の間隔をもって畝間を検出した。畝間の走向は東西方向であるが、14・15号溝以北では南北方向に走るものもある。出土遺物は土器の小破片がわずかに出土しているのみであり、図化できたものはない。県埋文センター調査の成果より9世紀半ば以前の畝跡と考えられる。

住居跡一覧

住居跡 No.	時代	形態	規模 (m)	主軸方向	主な出土遺物	備考
1	平安	隅丸方形	4.30×4.50	N	詳細本文中	4・7住<新
2	平安	隅丸方形	3.75×4.30	N	詳細本文中	
3	平安	隅丸方形	3.75×4.00	N-90°-E	詳細本文中	県SB3014<新
4	平安	隅丸方形	4.75×	N	詳細本文中	1住<古、5・7住<新
5	平安	不明	×	不明	須恵器甕	4住<古
6	平安	隅丸方形	3.20×	不明	須恵器坏	
7	平安	隅丸方形	4.20×4.45	N	詳細本文中	1・4住<古
8	平安	隅丸方形	3.45×3.50	N	詳細本文中	

第3節 小結

調査地周辺はその遺跡名が示すとおり、水田跡として捉えられていたところであり、県埋文センターの調査によって初めて集落跡の存在が明らかとなったものである。

検出した住居跡は調査地周辺に限ると、いずれも9世紀後半を前後する時期に集中する。これは県埋文センター調査地点でも同様である。一方、県道白石更埴線を挟んだ北側（県埋文センター調査の更埴条里遺跡5区）から検出された住居跡は8世紀～9世紀半ばを中心とするものであり、本調査地点とは対照的である。これらが一連の集落域であるとすると、周辺は8世紀に成立し、10世紀まで継続して集落が営まれた地点であると考えられる。屋代遺跡群、更埴条里水田址を含む一帯は9世紀末に起きたとされる「仁和の洪水」によって集落あるいは生産域の一時的絶が想定されている。事実、これまでの調査によって屋代遺跡群では「仁和の洪水」前後と考えられる住居跡はほとんど検出されていない。また、更埴条里水田址ではこの時に堆積したと考えられる砂層がほぼ全面に認められ、厚いところでは2m近い堆積が認められるところもある。さらに更埴条里水田址内では洪水後、水田が復田されることがなく集落が営まれていた地点も調査により検出されている。調査地周辺では洪水を挟んだ前後の時期に集落が途切れることなく営まれている。更埴条里水田址内は、南西から北東に向かって緩やかに傾斜していることが知られており、調査地周辺は高所に当たる地点である。このため洪水の被害を受けなかったものと考えられる。しかしながら、居住域としては好条件と思われる当該地であるが、古墳時代以前は居住域として使用された痕跡を確認することはできなかった。自然堤防上である屋代遺跡群からは古墳時代の住居跡が多数検出されていることから、何らかの社会的要因または自然的要因により調査地周辺に居住域が移動してきたものと考えられる。

更埴条里遺跡5区の集落域と本調査地点の集落域の間には畠跡が認められており、さらにこの集落域の南側においても畠跡を検出している。本調査地点の南からは集落跡は検出されておらず、集落域の南限に当たっている可能性がある。畠跡と集落跡は重複があるものの、ほぼ同時期のものと考えられ、生産域と居住域がセットとなって検出されている。生産域は畠のみであり、水田跡は検出していない。このことから調査地周辺が水田域よりもわずかではあるが高所に位置していることを示しているものと考えられる。

出土物にも注目すべきものがある。4号住居跡からは風字硯が出土した。脚部を欠損しているがほぼ完全な形を保っている。県内ではほとんど出土例がなく豊科町上ノ山窯跡群、松本市百瀬遺跡、塩尻市吉田川西遺跡に出土例がある程度である。また、検出した住居跡からは図化できるものは少ないものの、灰釉陶器が比較的多く出土している。県埋文センター調査分ではあるが、2号住居跡からは緑釉緑彩陶も出土している。これら特殊な遺物の出土から調査地周辺にある程度の有力者が居住していた可能性が指摘できるが、検出した住居跡の規模や平面形態には際立った違いは認められない。

第5章 郷津遺跡

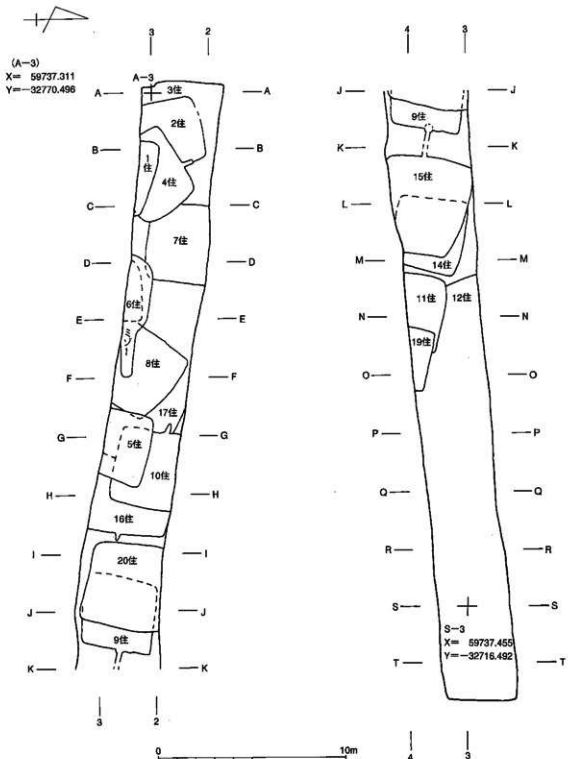
第1節 概要

発掘調査地は東経 138度 8分 3秒、北緯36度32分16秒、海拔 357.5m付近に位置し、更田市大字屋代字郷津に所在する。調査地周辺では平成元年度に鉄塔建設に伴い更田市教育委員会が、また平成6年度には北陸新幹線建設に伴い県理文センターがそれぞれ調査を行っている。

検出した遺構は竪穴住居跡18棟、溝跡1基である。住居跡の内訳は弥生時代2棟、古墳時代6棟、奈良時代4棟、平安時代2棟、時期不明4棟である。屋代遺跡群の中核を成すと考えられる高連道地点や土口バイパス地点とは異なり、検出面が非常に浅く現耕土の直下から遺構検出面となる。また弥生～平安時代まで同一の検出面であり、層位を分けることはできなかった。さらに数は少ないながらも屋代遺跡群内ではこれまであまり検出例のない弥生時代後期、箱清水期の住居跡が検出されている。県理文センター調査では今回の調査地点のすぐ北側から、平安時代の水田面を検出している。現状では調査地点の中央を走っていた畦畔を境として、北側の水田が約20cm程下がっており、これより北側では水田面が検出されるものと想定していたが、水田面は検出されず全面にわたって住居跡を検出した。調査区東側で住居跡は途切れるが、100m程東に行った屋代中学校調査地点では再び住居跡が検出されている。



第17図 郷津遺跡現況 (平成12年7月)



第18図 郷津遺跡全体図

第2節 遺構と遺物

2号住居跡 (第19図、図版11)

位置：A・B-3・4 規模：3.40m× 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-15°-W

新旧関係：3号住居跡を切り、4号住居跡に切られる。

床面：平坦であり、全面にわたって良く叩き締められていた。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高30cmを測る。

柱穴：不明

炉：地床炉を2基検出した。いずれも直径30cm前後であり、掘り込みは認められない。

遺物：出土量は少ない。1は鉢であり、外面は赤彩されている。2は台付甕の脚部、3は甕の底部である。この他に、櫛描波状文を持つ甕の破片が出土しているが、図化し得なかった。

出土遺物から弥生時代後期、箱清水期の住居跡と考えられる。

7号住居跡 (第20~22図、図版7、8、11、12)

位置：B-D-3・4 規模：4.10m× 平面形：隅丸方形

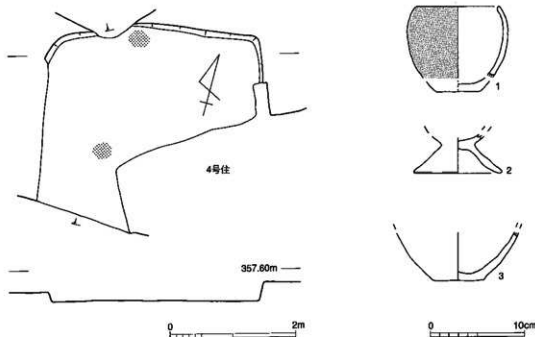
主軸方向：N-100°-E

新旧関係：4号住居跡に切られる。

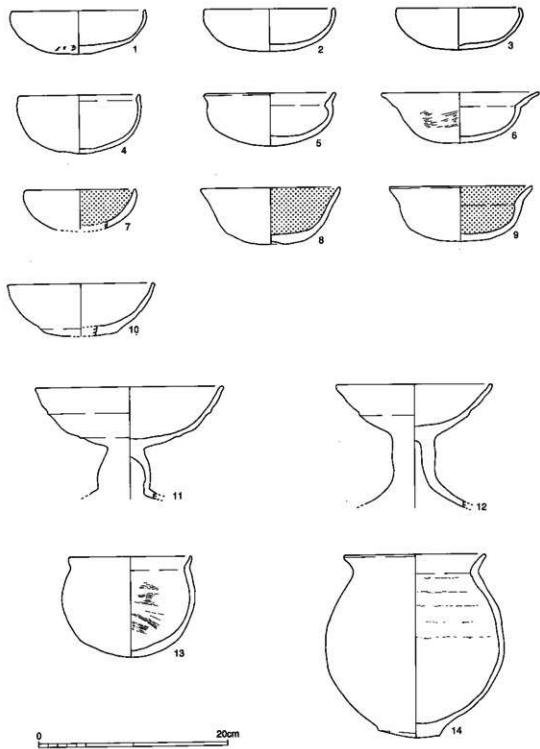
床面：ほぼ平坦で顕著であったが、締まりはなかった。

壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高25cmを測る。

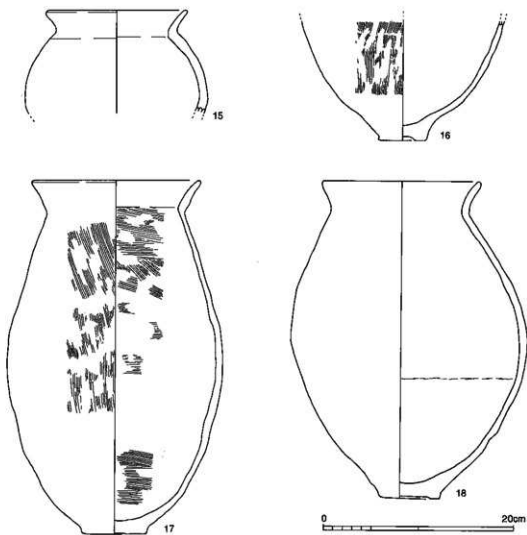
柱穴：1基検出しているが、主柱穴になるかは不明である。



第19図 2号住居跡及び出土遺物



第21图 7号住居跡出土遺物 1



第22図 7号住居跡出土遺物 2

9号住居跡 (第23図、図版8、13)

位置：I・J-4・5 規模：3.75m×3.80m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-10°-E

新旧関係：15号住居跡を切り、20号住居跡に切られる。

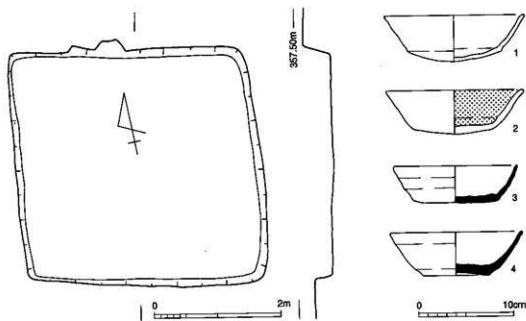
床面：ほぼ平坦で顕著であったが、締まりはなかった。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高45cmを測る。

柱穴：不明

遺物：20号住居跡との重複が多いため、確実に本住居跡に伴うと考えられるものは少ない。1・2は土師器坏で、坏部内面には稜が認められる。また2は内面黒色処理されている。3・4は須恵器坏であるが覆土中からの出土であり、20号住居跡に伴うものである可能性が高い。

内面に稜のある土師器坏の出土から、7世紀代と考えられる。



第23図 9号住居跡及び出土遺物

10号住居跡 (第24図、図版8、13)

位置：F~H-3・4 規模：3.95m× 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-75° -W

新旧関係：16・17号住居跡を切り、5号住居跡に切られる。

床面：平坦であり、顕著で良く叩き締められていた。

壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱穴：不明

カマド：西壁より検出した。袖は完全に破壊されており、火床と炭化物の広がりを確認しただけである。煙道は約50cm確認できる。

遺物：出土量は少ない。1は土師器坏である。内面黒色処理され、底部には回転系切痕が残っている。2・3は須恵器坏である。口縁は直線的に立ち上がり、底部には回転系切痕が残っている。いずれの坏も器高に比して底径がやや大きい形となっている。

出土した遺物から、8世紀後半と考えられる。

15住居跡 (第25・26図、図版9、13)

位置：J~L-3~5 規模：4.80m×5.05m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-80° -W

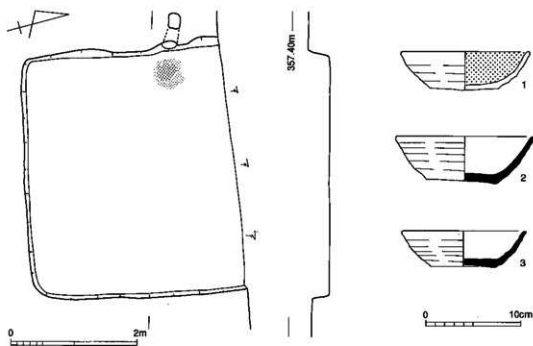
新旧関係：9・14号住居跡を切る。

床面：ほぼ平坦であり、顕著で良く叩き締められていた。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高40cmを測る。

柱穴：不明

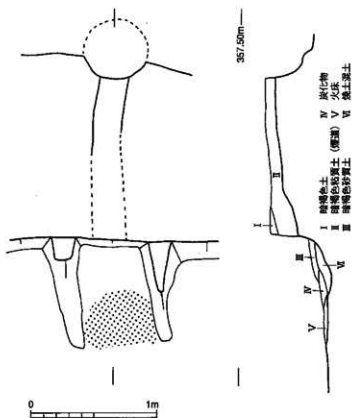
カマド：西壁中央から検出した。石の使用はなく、袖は長さ90cm、幅20cm前後を測る。煙道が約1.3mほど延びて煙出となるが、9号住居跡検出時に半分ほど破壊してしまった。



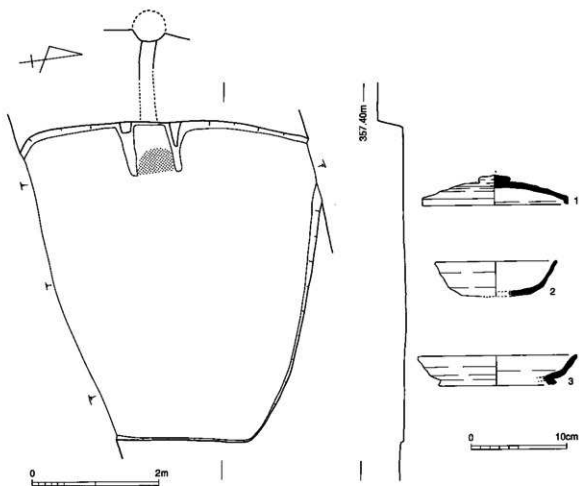
第24図 10号住居跡及び出土遺物

遺物：出土量は比較的多いが、図化できた遺物は3点のみである。1は須恵器坏壺で、外面1/3程を回転ヘラケズリ、その他はロクロナデによって成形されている。また端部は強くツマミダシされている。2・3は坏で、2の底部はヘラ切りである。また3には鋭く外反する高台が付けられている。

本住居跡から出土した須恵器坏は、ヘラ切りによって切り離されている。このことから8世紀半ばの住居跡と考えられる。



第25図 15号住居跡カマド



第26図 15号住居跡及び出土遺物

17号住居跡 (第26~28図、図版9、10、14)

位置：E・F-3・4 規模：5.45m× 平面形：方形

主軸方向：N-130°-E

新旧関係：5・6・8・10号住居跡に切られる。

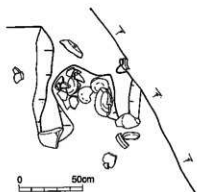
床 面：平坦であったが、締まりはなかった。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高15cmを測る。

柱 穴：P1~P3の3基を検出した。いずれも主柱穴になるものと考えられる。柱穴の配置から4本柱になるものと考えられる。

カマド：東壁より検出した。一部調査区外になるが、ほぼ完全な形で残っていた。袖は長さ95cm、幅25cm前後を測ることができ、前面には川原石が立てられている。カマド内の中央付近から良く焼けた火床を検出し、南側の袖の前面には炭化物の広がり認められる。煙道等は調査区外に延びると考えられるため、検出することはできなかった。

遺 物：カマド周囲から完形に近い遺物がまとまって出土したが、少なくとも4棟の住居跡によって切られているため、出土量は多くない。図化した遺物は、いずれもカマド周辺より出土したものである。1~4は土師器坏である。1~3はいずれも碗形の体部を持ち、口縁が短く外反する。調整は内



第27図 17号住居跡カマド

外面共、丁寧にヘラミガキされる。4も椀形の体部を持つが口縁は直線的である。5は鉢である。球形の体部を持ち、口縁は若干内湾する。内外面共、ヘラミガキは認められない。6～9は高坏である。6は坏部外面に1段の明瞭な段が認められ、円筒形の筒部に裾が大きく開く屈折脚高坏の形態を呈している。外面及び坏部内面はヘラミガキされている。7・8も屈折脚高坏の坏部であり、外面には1段の段が認められるが、7は椀形を呈するのに対し、8は箱形を呈するなどバラエティーに富んでいる。9も高坏の坏部であるが外面に2段の段が認められる。

椀形の体部に短く外反する坏や屈折脚高坏の出土から、本住居跡は5世紀中頃～後半にかけてのものと考えられる。遺物の組成を見ると、7号住居跡よりも先行するものと考えられるが、すでにカマドが導入されており、5世紀後半前後を境として炉からカマドに転換されたものと考えられる。

20号住居跡 (第30・31図、図版10、13)

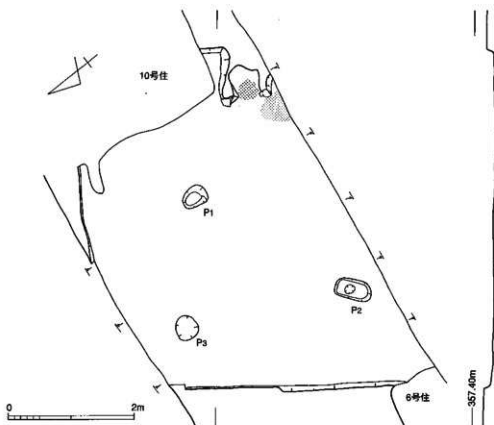
位置：H～J-3～5

規模：4.05m×4.50m

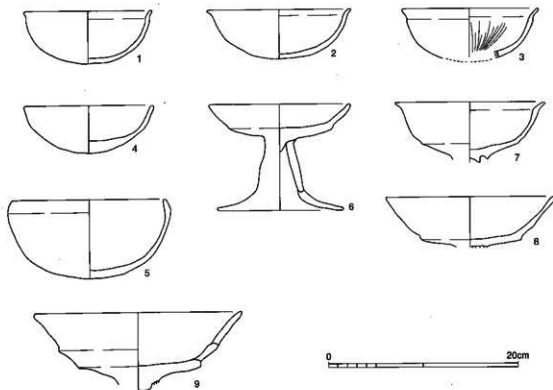
平面形：隅丸方形

主軸方向：N-10°-E

新旧関係：9号住居跡を切る。



第28図 17号住居跡



第29図 17号住居跡出土遺物

床 面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

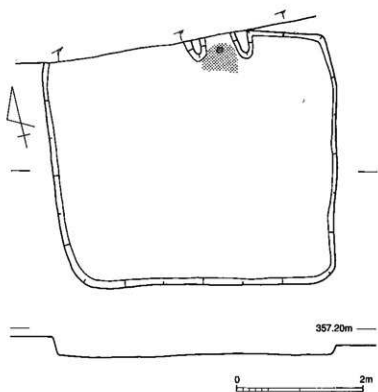
壁：やや角度を持って立ち上がり、最大高さ30cmを測る。

柱 穴：不明

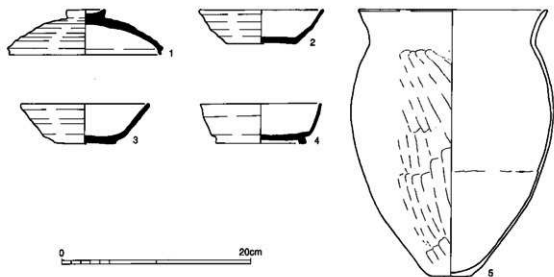
カマド：北壁から検出している。比較的良く残っているが、一部調査区外になるため全容は明らかではない。袖は幅30cm前後を測ることができ、良く焼けた火床の前面には角礫の支脚が立っている。

遺 物：9号住居跡と重複している部分が多く、出土量はそれほど多くない。1は須恵器坏蓋で、リング状のツマミが付いている。外面1/3程を回転ヘラケズリ、その他をロクロナデによって成型されている。2～4は坏身である。2・3はいずれも口縁が直線的に延び、底部には回転系切痕が残っている。4は箱形の体部を持ち、断面方形となる高台が付いている。5は土師器甕で、いわゆる「武蔵型甕」である。器壁はヘラケズリによって非常に薄く成型されている。口縁は緩く外反している。

出土遺物から8世紀末～9世紀初頭と考えられる。



第30图 20号住居跡



第31图 20号住居跡出土遺物

住居跡一覧

住居跡 No.	時代	形 態	規 模 (m)	主軸方向	主な出土遺物	備 考
1	不明	隅丸方形	3.80×	N-30°-E	遺物ほとんどなし	4住<新
2	弥生	隅丸方形	3.40×	N-15°-E	詳細本文中	4住<古、3住<新
3	弥生	不明	不明	不明	遺物ほとんどなし	2住<古
4	古墳	隅丸方形	3.35×3.85	N-35°-W	土師器甕	1住<古、2・7住<新
5	不明	隅丸方形	3.65×	N-20°-E	遺物ほとんどなし	8・10・16・17住<新
6	不明	隅丸方形	3.15×	N	遺物ほとんどなし	8住<古、5・17住<新
7	古墳	隅丸方形	4.10×	N-100°-E	詳細本文中	4住<古
8	不明	隅丸方形	3.95×	N-40°-E	遺物ほとんどなし	6住<古
9	古墳	隅丸方形	3.75×3.80	N-10°-E	詳細本文中	20住<古、15住<新
10	奈良	隅丸方形	3.95×	N-75°-W	詳細本文中	5住<古、16・17住<新
11	奈良	隅丸方形	3.75×	N-15°-E	須恵器高盤	19住<古、12住<新
12	古墳	不明	不明	不明	土師器甕	11住<古
13						欠番
14	古墳	隅丸方形	3.80×3.90	N-15°-E	土師器・須恵器坏	15住<古
15	奈良	隅丸方形	4.80×5.05	N-80°-W	詳細本文中	9・14住<新
16	奈良	隅丸方形	3.95×	N-100°-E	土師器坏	5・10住<古
17	古墳	方形	5.45×	N-130°-E	詳細本文中	5・6・8・10住<古
18						欠番
19	平安	隅丸方形	3.15×	N-10°-E	須恵器坏	11住<新
20	平安	隅丸方形	4.05×4.50	N-10°-E	詳細本文中	9住<新

第3節 小結

調査地周辺では平成元年度及び6年度に調査が行われている。遺構検出面は非常に浅く、耕作土直下から弥生～平安時代の住居跡を検出した。調査地を含む屋代遺跡群一帯は、千曲川右岸に形成された自然堤防上に展開する大集落遺跡であるが、遺構検出面が比較的深く、これほど浅い場所から検出される地点は屋代遺跡群内では他に例がない。

検出した遺構は竪穴住居跡18棟であるが、幅6mほどの細長い調査であったため全掘できた遺構はなかった。この中には弥生時代後期、箱清水期の住居跡が2棟含まれており、周辺の調査を合わせると当該期の住居跡は計8棟検出されている。出土遺物の中には古墳時代的な要素を持ったものも見られるため、検出した住居跡は弥生時代最終末または古墳時代初頭に位置付けることができるものと考えられる。屋代遺跡群内では当該期の住居跡は城ノ内、大塚遺跡を中心とした自然堤防の北側及び、東側の生仁遺跡を中心とした沢山川によって形成された微高地から多く検出される傾向が認められていた。自然堤防の西端に当たる本調査地点から弥生時代にさかのぼり得る住居跡がまとまって検出されたことは、屋代遺跡群内における集落の変遷を考える上で興味深い資料になるものと考えられる。

古墳時代の住居跡は6棟検出した。このうち7、17号住居跡からは多くの遺物が出土している。いずれも5世紀後半を前後する時期の住居跡と考えられるが、7号住居跡からは地床炉を、17号住居跡からはカマドを検出している。7号住居跡出土遺物にはカマドに伴うと考えられるものもあり、調査地周辺ではこの時期に炉からカマドへの転換が行われたものと考えられる。

奈良・平安時代の住居跡は6棟検出しているが、4棟が奈良時代に属するものと考えられる。これらの住居跡はいずれも主軸方向が正方位に対して10～15度振れるものであり、住居構築に際しての規則性が窺える。県埋文センター調査では本調査地点のすぐ北側から条里地割に則った畦畔を持つ、平安時代の水田面が検出されている。住居跡の主軸方向はこの畦畔の走向にほぼ一致する。

県埋文センター及び今回の調査によって、周辺は東西、南北とも70m以上の広がりを持つ集落域であることが明らかとなった。弥生時代の住居跡はこの集落域の北西部に集中する傾向が認められ、以後、時代を追うごとに居住域が拡大していったものと考えられる。本調査地点においても、弥生時代の住居跡は調査区の西端から検出されたのみであり、東に向かうにつれて新しい時代の住居跡が検出されている。そして平安時代の住居跡である19号住居跡付近を東端として、居住域が一旦途切れる。調査区西端では耕作土の直下で遺構検出面が確認されるが、この検出面は東に向かうに連れて徐々に深くなっていき、19号住居跡付近になると現地表下1.4mに達する。これらのことから、調査地周辺は北陸新幹線本線付近が自然堤防の最も高まった地点であり、ここを中心として弥生時代後期以降、徐々に集落が形成されていったものと考えられる。

第6章 一丁田遺跡

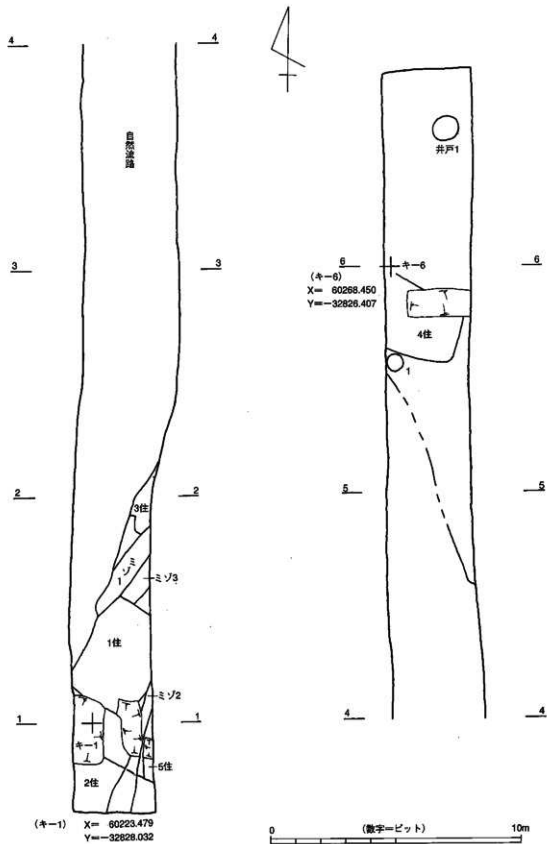
第1節 概要

発掘調査地は東経 138度 8分 0秒、北緯36度32分32秒、海拔 355m付近に位置し、更埴市大字屋代字一丁田に所在する。調査地周辺では、平成3年度に長野自動車道建設に伴い県埋文センターによって発掘調査が行われている。また平成5年度及び8年度には北陸新幹線建設に伴って、県埋文センターが調査を行っている。平成8年度の調査は関連市道に伴う調査であり、施工主体者の違いにより同一路線上を同時期に県埋文センターと更埴市が調査を行うこととなった。

検出した遺構は竪穴住居跡5棟、水田面1面、井戸跡1基、溝跡3基である。調査区中央付近は自然流路により包含層が流出していて、遺構を検出することができた地点は北、南端であった。検出した遺構もその多くがこの自然流路によって一部流出している部分があり、全掘できた遺構はない。5棟検出した住居跡のうち、時期の推定できるものは2棟のみであり、いずれも平安時代に属すると考えられるものである。水田面は遺構検出面の上層で確認でき、水田面出土遺物には近世陶磁器の破片が認められるため、近世以降のものと考えられる。また、井戸跡は中世と考えられるものであり、屋代遺跡群内ではかなりの数が検出されている。溝跡については重複する遺構を切って構築されているが、出土遺物がないため時期、性格等は不明である。



第32図 一丁田遺跡現況（平成12年7月）



第33図 一丁田遺跡全体図

第2節 遺構と遺物

1号住居跡 (第34・35図、図版15、17、18)

位置：2区 規模：4.05m× 平面形：方形

主軸方向：N-135°-E

新旧関係：1・2号溝に切られる。

床面：平坦であるが、西側は流出していた。

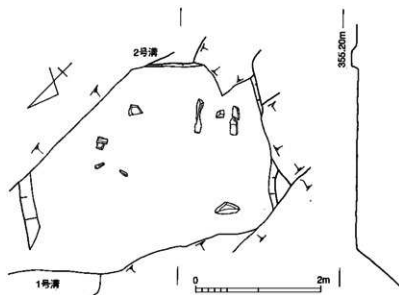
壁：東・南壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は角度を持っている。最大壁高15cmを測る。

柱穴：不明

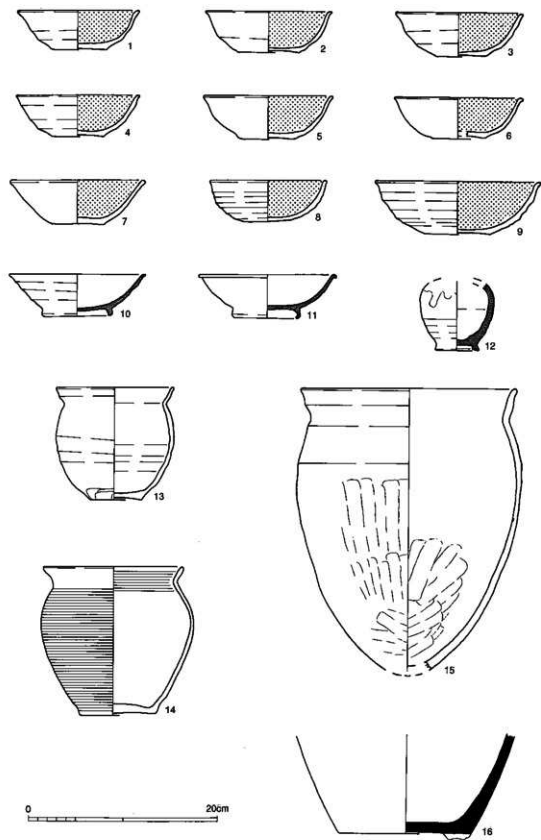
カマド：東壁南隅から検出した。袖には板状の石を用いて、カマド中央付近には支脚石が残されている。煙道等はカクランされていて不明であるが、カマド本体が壁よりもかなり内側に入っていると共に、住居跡の隅に構築されている。

遺物：住居跡内はほぼ全域から完形に近い遺物がまとまった量出土している。1～9は土師器坏である。いずれも内面黒色処理され、底部には回転糸切痕を残している。また口縁は若干外反気味であり玉縁状に肥厚している。10・11は灰釉陶器碗であり、いずれも釉はハケ塗りである。12は灰釉陶器小壺である。13・14は土師器の小型甕である。13がロクロロナデによる成形であるのに対し、14には外面ほぼ全域と内面にカキメが認められる。15は大型の甕であり、胴部上半をロクロロナデ、残りをヘラケズリによって成形された砲弾形の甕である。16は須恵器の甕である。

本住居跡から出土した食膳具は、内面黒色処理された土師器が主体を占め、須恵器の食膳具は出土していない。このため、9世紀後半頃の住居跡と考えられる。



第34図 1号住居跡



第35图 1号住居跡出土遺物

2号住居跡 (第36図、図版15、18)

位置：1区 規模：不明 平面形：不明 主軸方向：不明

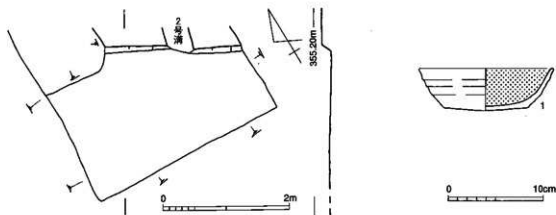
新旧関係：5号住居跡に切られる。

床面：ほぼ平坦である。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高15cmを測る。

柱穴：不明 カマド：不明

遺物：北壁の一部を検出しただけであり、出土量は少ない。1は土師器坏であり、内面黒色処理されている。



第36図 2号住居跡及び出土遺物

4号住居跡 (第37・38図、図版16、18)

位置：6区 規模：2.70m× 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-110° - E

新旧関係：なし

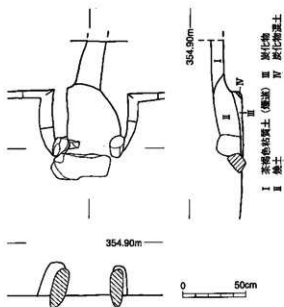
床面：ほぼ平坦である。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高25cmを測る。北壁がかなり歪んでいる。

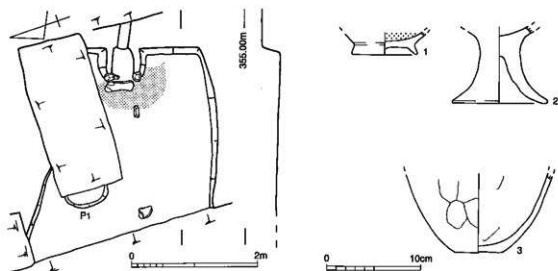
柱穴：1基検出しているが詳細不明である。
 カマド：東壁中央より検出した。袖の全面には河原石が立てられ、その前には架構石が落ちていることから、石組みのカマドであったと考えられる。煙道は40cm程延びて調査区外へと連している。

遺物：出土量は少ない。1は土師器坏の底部である。内面黒色処理されており、断面三角形となる高台が付いている。2は高坏の脚部である。3は「武藏型甕」の底部である。

出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。



第37図 4号住居跡カマド



第38図 4号住居跡及び出土遺物

1号井戸 (第39図、図版16)

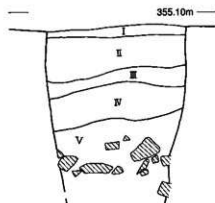
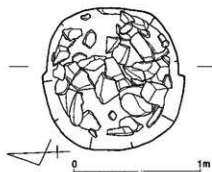
位置：7区 規模：直径1.15m 平面形：円形

新旧関係：なし

構造：ほぼ円形の井戸跡である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はほぼ水平の堆積を示しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。検出面下約1mの所から、人頭大の礫が投げ込まれたような状況で多数検出した。これより下層は崩落の危険性があったため、掘り下げを断念した。

遺物：小破片が多く、また出土量も少ないため図化できた遺物はない。

出土物の中には、瓦質の播鉢や内耳土器の破片が認められることから、中世に属する遺構であると考えられる。



I 灰茶褐色砂質土 II 灰褐色砂質土 III 灰褐色砂質土 (礫混)
IV 黄褐色砂質土 V 灰褐色砂質土

第39図 1号井戸

第3節 小結

調査地は中央部分が自然流路により流出していたため、実際に調査を行うことのできた部分はわずかであったが、住居跡5棟等を検出することができた。時期を推定できる住居跡は2棟のみであったが、いずれも平安時代に属すると考えられるものである。県埋文センターによる高速道路路地点や本調査と同時期に行われた厩代遺跡群7区の調査では古墳時代後期の住居跡が検出されているため、これらの調査結果とはやや様相を異にしている。むしろ、北陸新幹線本線部分の調査である厩代遺跡群6区の調査成果に近いものがある。

調査地の東方約150mに位置している一丁田尻遺跡では、平成11年度に行った調査により中世の水田跡が検出されただけであり、居住域として使用されていた痕跡を認めることはできなかった。調査地周辺では千曲川の旧河道が複雑に入り組んでおり、居住域は中州状の微高地に展開していたものと考えられる。本調査地点はこのような中州状の微高地の縁辺部に当たるものと考えられる。

住居跡一覧

住居跡 No.	時代	形態	規模 (m)	主軸方向	主な出土遺物	備 考
1	平安	方形	4.50×	N-135°-E	詳細本文中	
2	不明	不明	不明	不明	詳細本文中	5住<古
3	不明	不明	不明	不明	遺物ほとんどなし	
4	平安	隅丸方形	2.70×	N-110°-E	詳細本文中	
5	不明	不明	不明	不明	遺物ほとんどなし	2住<新

写 真 图 版



調査区全景
(長野県立歴史館提供)



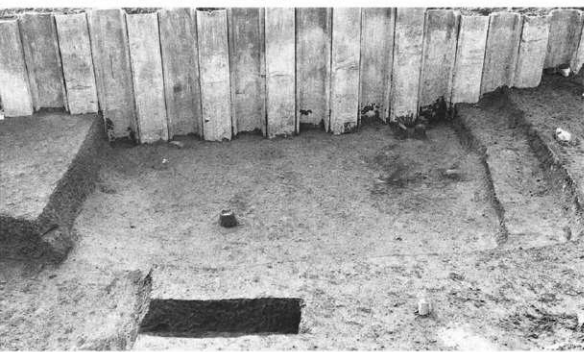
1号住居跡
(東側より)



3号住居跡
(東側より)



4号住居跡
(西側より)



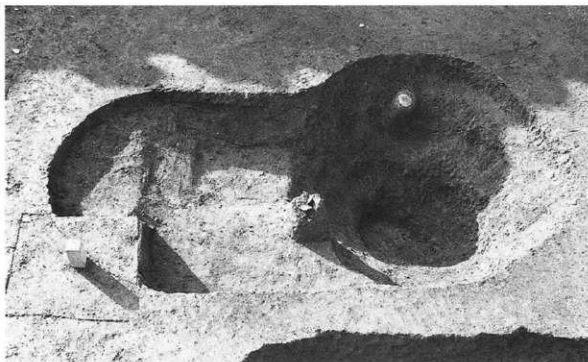
7号住居跡
(東側より)



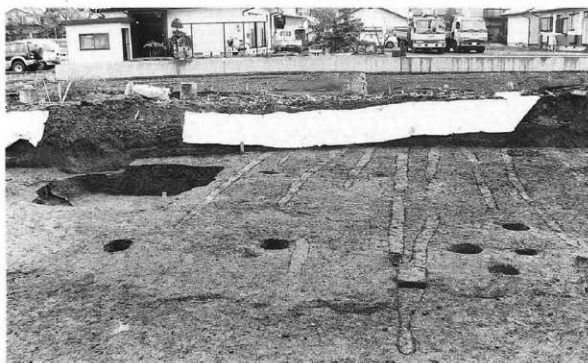
8号住居跡
(南側より)



左 8号住居跡カマド
右 同 張り出し



3号土坑
(西側より)

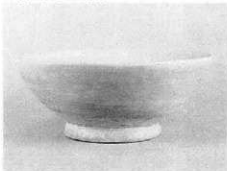


畝状遺構
(西側より)

1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物



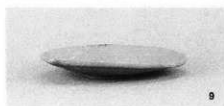
4号住居跡出土遺物



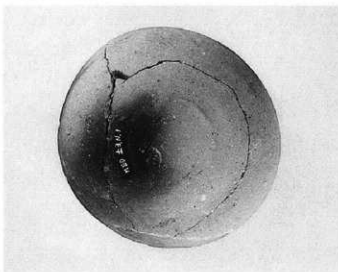
10

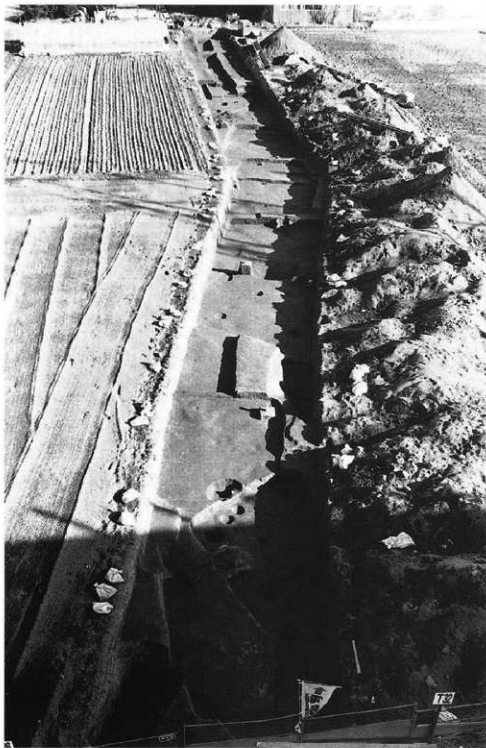
図版 6

7号住居跡出土遺物



3号土坑出土遺物





調査区全景
(西側より)



7号住居跡
(南側より)



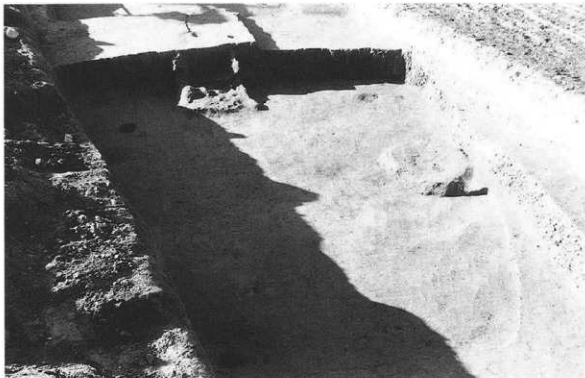
7号住居跡遺物出土状況
(北側より)



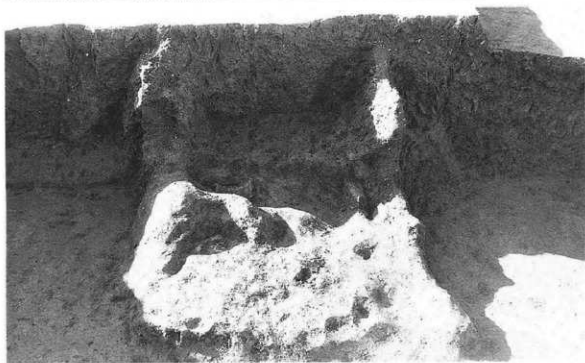
9号住居跡
(南側より)



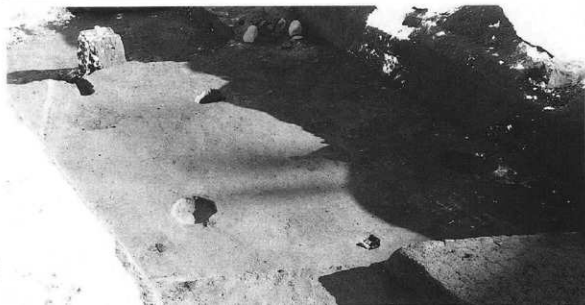
10号住居跡
(東側より)



15号住居跡
(東側より)



15号住居跡カマド



17号住居跡
(西側より)



17号住居跡カマド



20号住居跡
(南側より)



20号住居跡カマド

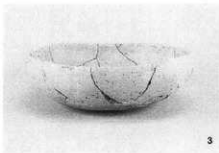
7号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



8



9



10

2号住居跡出土遺物



1



2



11



12



13



14



15



16



17

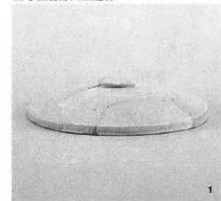


18

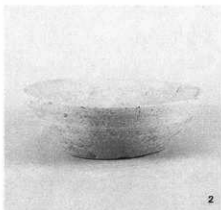
9号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物



10号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物



图版14

17号住居跡出土遺物



4



7



6



8

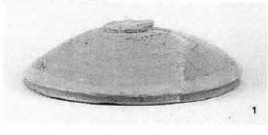


5



9

20号住居跡出土遺物



1



2



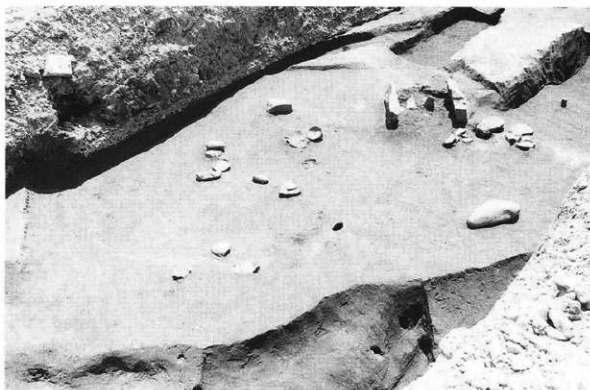
4



5



調査区全景
(北側より)



1号住居跡
(西側より)



2号住居跡
(南側より)



4号住居跡
(南側より)



4号住居跡カマド



1号井戸
(西側より)

1号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



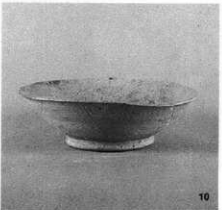
7



8



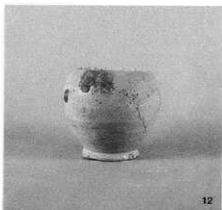
9



10



11



12

図版18

1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



4号住居跡出土遺物



報告書抄録

ふりがな	こうしょくじょうりすいでんしまえだちてん ごうついせき2 いっしょうだいせき							
書名	更埴条里水田址前田地点 郷津遺跡Ⅱ 一丁田遺跡							
副書名	一新幹線関連事業に伴う発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 生涯学習課 文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 Ⅷ026-273-1111							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °N	東経 °E	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうしょくじょうり 更埴条里 すいでんし 水田址 ままだちてん 前田地点	ながのけん こうしょくし 長野県 更埴市 やしろ ままだ 大字屋代字前田 うちだ 内田	20216	29	36 32 2	138 8 4	19941124～ 19950109	500	新幹線関連 市道建設に伴う 発掘調査
ごうつ 郷津	ながのけん こうしょくし 長野県 更埴市 やしろ ごうつ 大字屋代字郷津		31-22	36 32 16	138 8 30	19951124～ 19951227	300	
いっしょうだ 一丁田	ながのけん こうしょくし 長野県 更埴市 やしろ いっしょうだ 大字屋代字一丁田		31-9	36 32 32	138 8 0	19960412～ 19960430	300	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
更埴条里 水田址 前田地点	集落跡	平安時代	竪穴住居 土坑 畚	8棟 5基 1面	土師器、灰釉陶器		千曲川右岸の自然堤防 上の集落遺跡	
郷津	集落跡	弥生～ 平安時代	竪穴住居	18棟	弥生式土器、土師器			
一丁田	集落跡	平安時代 中世	竪穴住居 井戸	5棟 1基	土師器、須恵器			

更埴桑里水田址前田地点・郷津遺跡Ⅱ・一丁田遺跡

発行日 平成13年3月31日

発 行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105
